

Title	魏晋の文人における「狂」について：『世説新語』を中心として
Sub Title	The concept of “kuang” in Wei-Jin literati:with a focus on Shishuoxinyu
Author	八木, 章好(Yagi, Akiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.38 (2007. 3) ,p.157- 177
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20070331-0157

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

魏晋の文人における「狂」について

——『世説新語』を中心として——

八 木 章 好

はじめに

中国古代思想における「狂」には、大きく分けて「狂狷」と「佯狂」の二つの異なる系譜がある。¹⁾ 前者は、孔子が『論語』において「進取の気」として肯定的評価を与えたことに始まり、孟子がこれを祖述し、以後連綿として明末の王陽明にまで受け継がれて、儒家的な中国の伝統的精神文化の一側面を形成している。後者は、殷王朝の末に狂気をよそおって紂王の暴政を逃れた箕子に始まるものであり、乱世を生き延びるための明哲保身の処世術として中国の知識人たちが古代から長く守り伝えてきた。「狂」字はまた『莊子』の中にも特徴的な含意を以て現れる。「無用の用」に徹して禍を免れる保身の知恵としての「狂」は、「佯狂」の系譜上に位置するものであり、また一方、「狂狷」を表す「狂」は、何物にも束縛・制約されることのない思うがままの心の状態、ひいては個人の安心立命、絶対的自由の精神という莊子の中核的思想につながる概念として呈示されている。

魏晋の文人に見られる数々の奇行や狂態のさまは、こうしたさまざまな「狂」の概念、とりわけ『莊子』のそれを継承し、かつ実践したものであり、危難・災禍を回避するための韜晦的手段であることに加えて、道家的な生き方を標榜する文人精神の表れとして捉えることができる。また、当時の貴族階級の士人たちが五石散と称する薬物を常用していたことも、彼らの奇行・狂態に密接な関わりを持つと考えられる。さらに、この頃から書画の世界において、芸術家のあるべき形象として「狂」や「痴」が掲げられるようになったことも注目に値する。

本稿は、かように重層的にさまざまな要素が絡み合っている魏晋の文人における「狂」

の諸相について、その一つ一つの相を『世説新語』に収録された逸話を主な材料として整理し考察することを目的とする。

一 魏晋の時代風潮と『世説新語』

『世説新語』は、南朝宋の劉義慶（四〇三～四四四）が編纂した逸話集である。後漢末から東晋までの著名な人物の逸話、計一千条余りが収録されている。「德行」（有徳の行為）、「言語」（機知に富んだ会話）、「雅量」（度量の広い言行）、「排調」（人をやりこめる言動）、「惑溺」（女におぼれた男の話）など三十六の部門にテーマ分類し、さまざまな人間模様が映し出されている。各条とも人物の一つの行動、一つの言葉に着眼し、その人物の全体像を浮き彫りにするという手法がとられており、当時の士大夫たちの風采容貌・挙措進退・才気品行をわずか数行の簡潔な文章のうちに捉え、その人物の個性や気質を生き生きと描写している。その行間からは、貴族社会の風習や価値観など魏晋の時代相を窺い知ることができる。梁の劉孝標の注釈があり、四百余种の諸書を引用して大量の史料を補っている。

後漢末から東晋にかけての時代は、反乱や篡奪が相継ぎ、権力抗争が絶えることのない動乱の時代であった。そうした不安定な社会情勢を反映して、魏晋の時代には老荘思想が盛行した。「三日どうとくきょう道徳経を読まざれば、便すなわち舌本ぜつほんかん間の強こわばるを覚ゆ」（『世説新語』「文学」篇）²⁾ という殷仲堪の言にあるように、魏晋の文人たちは老荘の典籍に精通していた。そうした中で、『老子』『莊子』『易』の三書を「三玄」と呼んで尊崇する玄学が成立する。玄学は、魏の正始年間に何晏・王弼らが『老子』『易』を好み、その注釈を著して宣揚したことに始まり、のちに阮籍、嵇康らがとりわけ『莊子』を重んずるようになる。

玄学の隆盛に伴って、魏晋の名士たちの間では「清談」が盛んに行われるようになる。清談の起源は、後漢末に宦官の跋扈に抵抗した清流派の「清議」にあるとされている。これは政治批判を目的とした時事論議や人物批評であったが、魏晋の時代に至ると、社会不安から知識人たちは現実逃避の傾向を強め、世俗の政事や礼教道徳に背を向け、儒仏道の高遠な哲理を遊戯的に弄び、非現実的な空理空論を語り合うようになる。こうして清議はしだいに政治性を失い、超俗的で高雅な清談へと変貌するが、人物批評を語る伝統は依然として続いた。清談の中ではしばしば名士たちの容姿・言動・風格・度量などがとやかく論じられている。後漢末の許邵による「汝南月旦評」に見られるように、当時、人物を品評する風潮がすでに形成されており、さらに魏からは世間の評判によって官吏を登用する「九品官人法」が施行されたために、魏晋の貴族社会では人物批評にいつそう熱が入り、

互いに人を褒めたり貶したりして品定めする風潮が盛んになった。

やがて、こうした人物批評が逸話集として文字に書き留められるようになる。『世説新語』は、裴啓の『語林』、郭澄之の『郭子』など先行の書物を基にしながら、これらを適宜改編して成り立ったものである。

この時代において名士として良い評判を得るのは、必ずしも聖人君子のように品行方正に振る舞うことではない。むしろ型破りで痛快な言動やウィットに富んだ粋な発言がもてはやされ、人々は風変わりで個性的な生き方を競うようになる。そうした生き方の一つが「狂」であり、『世説新語』の中には文人たちの奇行や狂態の数々が克明に記されている。そうした例が最も多く集中しているのが「任誕」篇である。「任誕」とは、自由奔放、勝手放題の意であり、この篇には、常軌を逸した奇行・狂態を以て自らの存在を示そうとした人々の逸話が収められている。形骸化・形式化した礼教道德の束縛から解放され、気の向くままに行動する生活の中に真の人間性を模索していた人々の姿が描かれている。

「任誕」篇の冒頭に登場するのは、「竹林の七賢」と称する文人たちである。

ちんりゅう げんせき しょうこく けいこう かだい さんとう
陳留の阮籍・譙国の嵇康・河内の山濤、三人年皆相比し、康年少にして之に亜ぐ。
けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい
此の契に預かる者は、沛国の劉伶・陳留の阮咸・河内の向秀・琅邪の王戎なり。
し い かんちよう ちくりん しちけん
七人常に竹林の下に集い、肆意酣暢す。故に世に竹林の七賢と謂う。³⁾

とあるように、存分に痛飲しながら清談に耽った一群の文人であるが、中でも傑出した存在が阮籍と嵇康である。

二 カモフラージュとしての「狂」

阮籍、字は嗣宗。後漢の建安七子の一人である阮瑀の子。魏に仕えて従事中郎、歩兵校尉となり、世に阮歩兵と称す。著に「大人先生伝」「達莊論」「通易論」などがある。『晋書』や『世説新語』などの書物に記載されている阮籍の逸話には、反礼教的な韜晦の处世態度を物語るものが多い。特に、庇護者であった司馬昭との関わりで酒にまつわる話がよく知られている。『世説新語』「簡傲」篇には、

ぶんおうこうとく げんけい ぎ た ききよ
晋の文王功德盛大にして、坐席は嚴敬、王者に擬す。唯だ阮籍のみ坐に在りて、箕踞
しょうか かんほう しじやく
嘯歌し、酣放自若たり。⁴⁾

とあり、司馬昭の座に在ってただ一人あぐらをかいて嘯き歌い、酔っぱらって平然としていたという。『晋書』「阮籍伝」には、

文帝（司馬昭）初め武帝（司馬炎）の為に婚を籍に求めんと欲すれど、籍酔うこと六十日、言うを得ずして止む。……

籍又能く青白眼を為す。礼俗の士を見れば白眼を以て之に對す。嵇喜來りて弔するに及び、籍白眼を作し、喜懼ばずして退く。喜が弟康之を聞き、乃ち酒を齎し琴を挾みて造るに、籍大いに悦び、乃ち青眼を見わす。是に由りて礼法の士、之を疾むこと讎の若し。……

時に意に率い独り駕し、徑路に由らず、車迹の窮する所、輒ち慟哭して反る。⁵⁾

など、世俗の礼法を無視した振る舞いや常軌を逸した奇怪な言動を示す数々の逸話が並び記されている。

阮籍のこうした奇行・狂態は一種の自己防衛であり、狂気をよそおうことで自らを無用者として顕現し、自分に対する政治の風波を避けようとしたものである云々と一般的には説明されている。後述のように、これは単なる自己防衛ではなく、そこには思想的な要因、さらには社会習俗的な要因が絡んでいるのであるが、基本的には明哲保身の処世態度を示したものであると解釈してよいであろう。魏晉の際の陰難で陰惨な時代を生き抜くためのしたたかな処世術である。「阮籍伝」に、

籍は本濟世の志有るも、属々魏晉の際、天下に故多く、名士全うせる者有ること少なし。籍是に由りて世事に与からず、遂に酣飲するを常と為す。⁶⁾

とあるように、もともとは濟世の志を抱いて政界に入った阮籍も、乱世にあっては初志を貫き通すことは難しく、のちにその姿勢を転換せざるを得なくなる。上文の中でいう生命を全うすることができなかつた名士とは、嵇康らのことを指している。

嵇康、字は叔夜。魏の中散大夫となる。魏王朝と姻戚関係にあったため晋王朝においてはもともと難しい立場に置かれていたが、「山巨源に与えて交わりを絶つ書」⁷⁾の中の「湯・武を非とし、周・孔を薄ず」という一節が名教を露骨に否定するものとして司馬昭の怒りを買ひ、のちに友人呂安の不孝罪に連座して処刑された。阮籍が常に酔態を呈して政事との関わりを避け、官途に野心のないことを示そうとしたのは、まさにこうした時代

魏晋の文人における「狂」について

の危うさゆえであった。司馬氏政権の統治イデオロギーに抵触する名教批判によって死を招いた嵇康とは対照的に、阮籍は本意を包み隠して政治的、倫理的な発言を控えていたために天寿を全うし得たのである。北宋・蘇軾は「阮籍嘯台」詩で、

阮生古狂達 げんせい いにしえ きょうたつ
 阮生は 古 の 狂 達
遁世黙無言 よ のが もく げん な
 世を遁れ黙として言無し

と詠じて阮籍の処世を追慕し、近人の銭鍾書は『管錐編』の中で阮籍と嵇康を並べて、

嵇・阮皆狂士と号す。然れども阮は乃ち世を避くるの狂にして、所以に禍を免る。嵇は則ち世に忤るの狂にして、故に以て禍を招く。⁸⁾

と論じ、それぞれ「避世之狂」、「忤世之狂」と称して両者を概括している。

阮籍の詩が極めて難解なもの、詩作によって災厄に遭うのを恐れてことさら抽象的、韜晦的な表現を用いているためといわれる。『文選』卷二三の「詠懷詩」李善注に、

嗣宗身は乱朝に仕え、常に諂に罹り禍に遇わんことを恐れ、茲に因りて詠を発す。
故に毎に憂生の嗟き有り。志は刺譏に在りと雖も、文は隱避すること多く、百代の下、
情を以て測り難し。⁹⁾

とあるのは、そうした見解を代表している。

魏晋の時代において、こうした韜晦的所作は阮籍にのみ特徴的に見られるものではない。時の権力者との縁談を断るといふ似たような話は王衍にもある。『晋書』「王衍伝」に、

楊駿女を以て焉に妻わさんと欲す。衍之を耻とし、遂に狂を陽りて自ら免る。¹⁰⁾

とあり、王衍は楊駿（晋の武帝の楊皇后の父）の娘との縁談を迫られ、「陽狂」によってこれを破談にし、のちの禍（八王の乱）を免れたという。

さて、このように「狂」が自らの身を守るためのカモフラージュの役を担っている例を『世説新語』の中からさらにいくつか拾ってみよう。「方正」篇に、次のような話がある。

孔車騎中丞と共に行き、御道に在りて匡術に逢う。賓從甚だ盛んなり。因りて往きて車騎と共に語る。中丞初めより視ず、直だ云う、「鷹化して鳩と為るも、衆鳥猶お其の眼を悪む」と。術大いに怒り、便ち之を刃せんと欲す。車騎車より下り、術を抱きて曰く、「族弟発狂す。卿我が為に之を宥せ」と。始めて首領を全うするを得たり。¹¹⁾

孔車騎（孔愉）のいところ孔群が匡術に対して暴言を吐く。匡術が怒って孔群に斬りかかると、孔愉が「いところは発狂したのだ、許してやってくれ」と取りなして、孔群は命拾いをするという話である。本来なら許されないところを「狂」であるから見逃してくれということであり、「狂」は危難を逃れるための免罪符のようなものとして働いていることになる。狂者に対しては罪を問わないという暗黙の社会的ルールがあることを前提としてはじめて成り立つやり取りである。

「黜免」篇の諸葛宏の話もこれと相通ずるところがある。

諸葛宏西朝に在りて、少くして清誉有り、王夷甫の重んずる所と為る。時論も亦以て王に擬せり。後継母の族党の讒する所と為り、之を誣して狂逆と為す。将に遠く徙されんとし、友人王夷甫の徒、檻車に詣りて与に別る。宏問う、「朝廷何を以て我を徙さんとするや」と。王曰く、「卿を狂逆と言う」と。宏曰く、「逆ならば則ち應に殺すべし、狂ならば何ぞ徙す所あらん」と。¹²⁾

諸葛宏が讒言を受けて遠方へ流されることになった。罪名が「狂逆」であることを知った諸葛宏は「逆というならば死罪も当然だが、狂というならば流される筋合いはない」と反駁する。「逆」は君主や体制に背く反逆の行為であり、論ずる余地無く法によって裁かれる大罪である。しかし、「狂」は罪にはならない。むしろ、「狂」であることによって罪が情状酌量されるのである。狂者は普通の社会生活を送ることができない者として、倫理秩序の外に置かれる。元来「狂」や「痴」は疾病の一種であり、これを患う者は人間社会の枠から弾き出されるわけであるが、そのことによって、正常な人間に適用される倫理的準則や法的罰則が適用されなくなるのである。つまり、一種の逃げ道が与えられることになるわけであり、現代社会において精神鑑定で異常を認められた犯罪者に減刑が与えられるのと似通っているともいえよう。

また、「狂」は相手の警戒心を解く方策としても用いられる。「任誕」篇に、

魏晋の文人における「狂」について

蘇峻の乱に、諸庾逃散す。庾冰時に呉郡為り、单身奔亡す。民吏皆去り、惟だ郡卒のみ独り小船を以て氷を載せ銭塘口に出で、蘧蔭もて之を覆う。時に峻は賞募して氷を覓め、所在に属して搜検すること甚だ急なり。卒は船を市渚に捨て、因りて酒を飲みて酔いて還り、棹を舞わして船に向かいて曰く、「何れの処にか庾呉郡を覓む。此の中便ち是なり」と。氷大いに惶怖するも、然れども敢て動かす。監司は船の小にして装の狭きを見、卒狂酔すと謂い、都て復た疑わず。自ら送りて瀾江を過ぎ、山陰の魏家に寄りて、免るるを得たり。¹³⁾

とあるように、この兵卒は「狂酔」によって追っ手の警戒心・猜疑心を解いて、庾冰を難から救っている。狂態を呈して先方から相手にされないように振る舞うことによって相手を欺くのである。

先に挙げた阮籍の例にも見られるように、カモフラージュとしての狂態の中で最も一般的、かつ簡便な方法は泥酔によるものである。北宋・葉夢得『石林詩話』の中に、晋代の人々の飲酒について示唆的な一節がある。

晋人多く飲酒のことを言い、沈酔に至る者有るも、其の意未だ必ずしも真に酒に在らず。蓋し時方に艱難にして、人各々禍を懼れ、惟だ酔いに託して、以て世故より疏遠すべからんのみ。……飲者は未だ必ずしも劇しくは飲まず、酣者は未だ必ずしも真には酔わず。¹⁴⁾

人々はしばしば酒の話をし、泥酔する者もいるが、彼らの目的は必ずしも酒そのものにあるわけではない。苦難の時代に生きた人々は禍が及ぶのを恐れ、酔態にかこつけて世間の事柄から遠ざかろうとしたのだという。つまり、酒に酔うことは災厄を避けるための手段として様式化していて、その目的が達せられればよいわけであるから、人々は必ずしも本当に暴飲したり泥酔したりしたわけではなく、ただそのふりをしていただけなのだというわけである。

三 パフォーマンスとしての「狂」

阮籍をはじめとする魏晋の文人の「狂痴」な振る舞いは、上に述べたように、基本的には保身を意図とした処世術である。しかしながら、これらはただ単に消極的な逃避や自己

防衛としてなされたものではなく、ある意味で一種の積極的な自己主張、自己表現の形として解釈した方がよい場合がある。礼教、すなわち儒家の道徳的規律に相反する奇行・狂態は、儒家と対峙する道家流の生き方を実践しようとするもの、老荘的な自由の境地を追求するものとして捉えることができるのである。

老荘思想が盛んであったこの当時、奇行や狂態そのものが世俗を超脱した高雅な文人精神を寄託する士大夫の行動様式としてもはやされるような時代風潮があった。白川静が「狂字論」で、

阮籍のことを人は痴と称し、仲長統のことを人は狂生と呼んだ。狂や痴は、このころには一種の褒め言葉とされており、超脱の人をいう。……

もしその礼教的文化が社会の理性であるならば、そのような理性の非理性性、不合理性を告発するほかはない。そしてそれは狂の精神に外ならない。阮籍も嵇康もいわばそのような狂の世界に生を托した人であった。¹⁵⁾

と述べるように、そうした風潮の中においては、「狂」や「痴」は決して誹謗ではなく、人物評としてはむしろ敬慕の念さえ含んだ賛辞であり、文人たちもまた自ら「狂」の人、「痴」の人たらんとしたのである。

再び『世説新語』の中から、まず阮籍の例を見てみよう。「任誕」篇に、

阮步兵母を喪い、裴令公往きて之を弔す。阮方に酔い、髪を散じて牀に坐し、箕踞して哭せず。裴至り、席を地に下し、哭し弔嗥し畢りて、便ち去る。或ひと裴に問う、「凡そ弔は、主人哭して、客乃ち礼を為す。阮既に哭せず、君何為れぞ哭す」と。裴曰く、「阮は方外の人なり、故に礼制を崇ばず。我が輩は俗中の人なり、故に儀軌を以て自ら居る」と。¹⁶⁾

とあるように、阮籍は母親の葬儀の際、哭礼もせずに泥酔して髪を振り乱し足を投げ出して坐ったまま弔問客に應對したという。この逸話には思想的背景がある。『莊子』「至楽」篇に、

莊子の妻死し、恵子之を弔す。莊子則ち方に箕踞し盆を鼓して歌う。恵子曰く、「人と与に居りて、子を長じ身を老いしむに、死して哭せざるは亦足れり。又盆を鼓して

歌うは、亦甚だしからずや」と。莊子曰く、「然らず。是れ其の始めて死するや、我独り何ぞ能く慨然たる無からんや。其の始めを察するに、本生無し。徒に生無きのみならずして、本形無し。徒に形無きのみならずして、本気無し。芒芴の間に雑わり、変じて気有り、気変じて形有り、形変じて生有り、今又変じて死に之く。是れ相与に春秋冬夏四時の行りを為すなり。人且に偃然として巨室に寝ねんとするに、我嗷嗷然として随いて之を哭するは、自ら以て命に通ぜずと為す、故に止めたるなり。¹⁷⁾

とあるが、阮籍の狂態は、まさにこの莊子の妻が死んだ時の寓話を実践したものである。阮籍の逸話の中では、自身の行為に対する理由の説明は一切記されていないが、これが『莊子』の中で披露されている「万物化生」の道理に基づくものであることは明白である。

弔問に訪れた裴令公（裴楷）は、阮籍のことを「方外之人」と呼んでいる。これもまた『莊子』に見える言葉で、礼教道徳に基づく規範や常識によって形作られる四角い世俗の枠から外れた人間のことをいう。¹⁸⁾ 阮籍はまさにこの「方外之人」を演じているのである。自分は礼教のしきたりには束縛されない、自分は世俗を超越した世界に遊んでいるのだという道家流の生き方を誇示する姿勢が窺える。

阮籍はまた母の服喪中にも狂態を演じてみせている。同じく「任誕」篇に、

阮籍母の喪に遭い、晋の文王の坐に在りて酒肉を進む。司隸の何曾も亦坐に在りて曰く、「明公は方に孝を以て天下を治む。而るに阮籍は重喪を以て顯かに公の坐に於いて酒を飲み肉を食らう。宜しく之を海外に流し、以て風教を正すべし」と。文王曰く、「嗣宗は毀頓すること此くの如し。君共に之を憂う能わざるは、何の謂ぞや。且つ疾有りて酒を飲み肉を食らうは、固より喪礼なり」と。籍は飲噉して輟めず、神色自若たり。¹⁹⁾

とあるように、阮籍は服喪中にもかかわらず司馬昭の座に在って酒を飲み肉を食らっていた。厳正な人柄で知られる司隸校尉の何曾がその場に同席していて処罰を進言したが、司馬昭はまったく取り合わず、その間阮籍は泰然自若として飲み食い続けていたという。

ここでの阮籍の狂態はもはや韜晦を意図するものではない。阮籍は司馬昭が自分に危害を加えないことをわかった上でこうした振る舞いをしているのであるから、これは自分流の生き方を顯示するためのパフォーマンスと見なした方がよい。阮籍が忌み嫌ったのは形骸化した礼教道徳の虚偽性である。とりわけ父母の葬儀や服喪は儒家の礼教道徳において

極めて重要な儀礼であるがゆえに、それをないがしろにする態度は、脱俗的、反礼教的な姿勢を示すには最も効果的な宣伝になるのである。

さて、「方外」の狂者としては、さらに「簡傲」篇に謝奕の逸話がある。

温おんの坐まに在るも、岸幘がんさくしやうえい嘯詠せうえいし、常日に異なる無し。宣武せんぶつね毎に曰く、「我が方外の司馬なり」と。遂に酒に因りて、転うたた朝夕の礼無し。桓舍かんおきて内に入るや、奕えきすなわ輒ち復た随ゆいて去く。後奕もとの酔うに至り、温主まみの許に往きて之を避く。主曰く、「君に狂司馬無くんば、我何に由りて相見まみゆるを得ん」と。²⁰⁾

謝奕は主君である桓温の座に在っても「岸幘嘯詠」して普段と異なることがなかった。「岸幘」は頭巾を後ろに傾けてかぶる阿弥陀かぶりのこと。額を露出させるので礼儀作法に反した放埒な態度をいうが、故意にこうした態度をとるのは、身なりにこだわらない洒脱なさまを示すものである。桓温は彼を「我が方外の司馬」と呼んで特別待遇した。後に奔放不羈な地方官吏のことを「狂司馬」と称するのは、桓温の妻（南康長公主）が謝奕をそう呼んだことに由来する。

このほか、明らかに脱俗的、反礼教的姿勢を誇示する演技風の狂態としては、「任誕」篇に見える劉伶の逸話がよく知られる。

劉伶りゅうれい恒つねに酒を縦ほしにして放達なり。或とき衣を脱ぎ裸形らけいにして屋中に在り。人見て之を譏そしる。伶曰く、「我天地を以て棟宇とううと為し、屋室こんいを幘衣なんすと為す。諸君何為れぞ我が幘中に入るや」と。²¹⁾

劉伶が彼の放埒な振る舞いを譏る俗物に向かって「なんで俺のフンドシに入ってきたのだ」と言い返すという痛快な逸話であるが、これは明らかなパフォーマンスであり、『晋書』「劉伶伝」に、

情を放ち志ほしを恣まにし、常に宇宙を細とし万物ひとを齊ひとしとするを以て心と為す。²²⁾

とあるのをそのまま演じたようなものである。阮籍の場合と同じように、やはり荘子の思想が根底にあり、「天地と我とは並び生じ、万物と我とは一いつ為り」²³⁾という荘子の「万物斉同」の思想を実践する行為である。

「任誕」篇にはさらに、死後の評判より今この一杯の酒を飲みたいと言い放つ張翰の話、蟹のハサミを片手に一生酒の池でバタバタ泳いでいたいという畢卓の話、遊山に出かけるたびに鉄砲玉になってしまう孫純の話など、放埒・放縦な狂態の例は枚挙にいとまがない。²⁴⁾ この類の「狂」は、社会の常識や準則にとらわれない自由気ままで勝手放題な行動をとるさま、あるいは目的や意図を持たずにただ気の向くままに往くさまをいうものであり、『莊子』の「猖狂」、ひいては「逍遙」の思想を受け継ぎ、これを実践しようとしたものと考えてよいであろう。

このように魏晋の文人たちは自覚的に狂態を演じたのであるが、それは狂態そのものを目的としていたわけではない。彼らが目指していたのは、「狂」なる言動を通じて「達」の境地に至ることであった。²⁵⁾ 「達」の概念は儒家にも道家にも見られるものであるが、ここでいう「達」は後者のそれであり、とらわれない自由奔放な行為を物の道理に通じた「達」と見なしていた。『世説新語』で見る限りでは、魏晋において初めて「達」を以て称されたのは阮籍であり、彼の宏達で礼俗に縛られないさまを当時の人々はそう称した。²⁶⁾ のち、多くの文人たちがこれに追随し、「德行」篇に、

王平子・胡毋彦国諸人は、皆任放を以て達と為し、或いは裸体なる者有り。楽広笑いて曰く、「名教の中自ずから楽地有り、何為れぞ乃ち爾るや」と。²⁷⁾

とあるように、王澄・胡毋輔之ら名士たちは、もっぱら「任放」（気ままで放埒）な行為を以て「達」を気取るようになる。²⁸⁾ 『晋書』「光逸伝」には、

初め至るに、属々輔之は謝鯤・阮放・畢卓・羊曼・桓彝・阮孚と与に髪を散じて裸裎し、室を閉じて酣飲すること已に日を累ねり。逸将に戸を排して入らんとすれば、守者聴かず、逸便ち戸外に於いて衣を脱ぎて頭を露し、狗竇の中より之を窺いて大いに叫ぶ。輔之驚きて曰く、「他人決して爾する能わず。必ず我が孟祖（光逸の字）なり」と。遽かに呼び入れ、遂に与に飲み、昼夜を捨かず。時人之を八達と謂う。²⁹⁾

とあり、「八達」と呼ばれた八名の放縦曠達の名士たちが裸体で髪を振り乱し昼夜を問わず酒宴に興じたさまが記されている。そこには、「達」を自任する文人たちの放誕の度合いがしだいにエスカレートし、かつ集団化していった状況を窺い見ることができる。

四 ファッションとしての「狂」

魏晋の文人の狂態に多く酒が伴うことは、前章までに引用した諸例にてすでに明らかであろう。とりわけ阮籍の逸話にはほとんど酒が付きものであり、劉伶には「酒徳頌」³⁰⁾と題する酒を讃える文章まである。

もう一つ、この時代の文人の狂態を考える上で見過ごせないのが、薬物を服用して気分を昂揚させるという当時の一種のファッション（風習、流行）である。『世説新語』「言語」篇に、

何平叔かへいしゅく云う、「五石散ごせきさんを服すれば、唯だ病ちを治するのみに非ず、亦神明開朗あらしんめいかいろうなるを覚ゆ」と。³¹⁾

とあるが、何平叔（何晏）がここで病が治るばかりでなく気分が晴れ晴れするとしている「五石散」とは、魏晋から唐代にかけて貴族の間で流行した一種の覚醒剤のような麻薬である。このことについては、つとに魯迅が「魏晋の気風および文章と薬および酒の関係」の中で詳しく述べている。³²⁾

何晏は後漢末の大將軍何進の孫、曹操の女婿であり、のち曹爽に重用されて吏部尚書となる。『老子』や『易』に精通し、観念的な哲学論議を好み、魏晋の「清談」の祖とされている。色白の美貌の持ち主としても名高いこの貴公子は、また文人の薬物服用の元祖でもある。上に挙げた逸話の劉孝標注は『寒食散論』を引いて、

秦丞相（秦承祖の誤り）『寒食散論』に曰く、「寒食散かんしよくさんの方、漢代に出ずと雖も之を用うる者寡すくなく、伝なうること有る靡し。魏尚書何晏、首かあんめて神効はじしんこうを獲、是に由りて大いに世に行われ、服する者相尋つぐなり」と。³³⁾

とある。ここでいう「寒食散」は五石散のことで、石鍾乳・石硫黄・白石英・紫石英・赤石脂を調合した鉱物系の薬である。はじめて五石散の処方をしたのは、後漢の張仲景であるが、その頃はまだ広く用いられてはいなかった。³⁴⁾ 魏に至って、虚弱体質であった何晏が自らその処方に手を加え、滋養を補い気分を昂揚させる目的で用いるようになった。

その後、同じように鉱物を原料とした煉丹術で仙薬を作り不老長寿を希求する神仙思想

と相俟って、五石散は貴族の間で服用者が増えて大いに流行する。愛用者としてよく知られる文人には、王弼・夏侯玄・王戎・嵇康・王羲之らがいる。五石散の薬剤は非常に高価であって、一般庶民には手が届かなかったことから、五石散を服用することは風流な貴族であることの証であり、一種のステータスシンボルのようにさえなっていた。

また、隋・巢元方撰『諸病源候総論』巻六「解散病諸候」中の「寒食散發候」の項に晋・皇甫謐の言を引いて、

近世尚書何晏、声に耽り色を好み、始めて此の薬を服す。心に開朗を加え、体力転た強し。京師翕然として、伝えて以て相授く。歴歳の困しみも、皆終朝ならずして愈ゆ。衆人近利に喜び、未だ後患を視ず。晏死するの後、服する者彌々繁く、時に于いて輟まず。³⁵⁾

とあり、その効能と評判を伝えているが、ここでことさら「耽聲好色」の一句を加えていることからすれば、その使用目的の一つは、性行為における媚薬や強壮剤としての効力にあったと推察できる。³⁶⁾

ところが、こうして病を治し体力を増強する効果がある反面、五石散は非常に毒性が強いために副作用が激しく、服用後に然るべき手順を経て行動しないと死に至ることもあるという危険な薬であった。まず、五石散を飲んだ後はじっと休んでいてはならず、すぐにその毒を発散させるために歩き回らなければならない。これを「行散」という。『世説新語』「德行」篇に、

初め桓南郡（桓玄）・楊広は共に殷荊州（殷仲堪）に説く、「宜しく殷覬の南蛮を奪いて以て自ら樹つべし」と。覬も亦即ち其の旨を曉り、嘗て行散に因りて、率爾として下舎に去りて、便ち復た還らず。内外預かり知る者無し。³⁷⁾

とあり、南蛮校尉の殷覬が身の危険を察知し、行散を口実にして役所から私宅へ下がったという逸話を載せている。この他にも『世説新語』には、所々に貴族たちの行散の様子を示す記述が見られる。³⁸⁾

そして、行散した後は、発熱して身体中が熱くなり、やがて寒気がしてくるが、この時厚着はせずに薄着をしてさらに冷水をかぶる。また、空腹であってはならず、昼夜を問わず一日に何度も食事をとらなくてはならない。ところが、温かい食事は禁物で、必ず冷た

いものを食べなくてはならない。但し、酒だけは例外で、逆に温めて飲まなければならない。「任誕」篇に、

桓南郡かんなんぐん召されて太子洗馬たいしせんばと作り、船ふねを荻渚てきしよに泊す。王大散おうだいを服せし後已すこに小しく酔い、往きて桓つらを看る。桓つら為ために酒さけを設たてくるも、冷飲れいんする能よわず、頻しきりに左右しうに語かたぐ、「酒を温めて来らしめよ」と。桓乃ち流涕りゅうてい嗚咽めいげんし、王便わうち去らんと欲ほす。桓手巾ていしんを以て涙なみだを掩おほい、因よりて王わうに謂いわいて曰いく、「我が家諱かきを犯かすのみ、何ぞ卿けいが事ことに預まからん」と。王歎なげじて曰いく、「靈宝れいほう（桓玄）は故自もとより達とくなり」と。³⁹⁾

とある。王大（王忱）が桓玄の父（桓温）の諱を犯した逸話であるが、ここで「冷飲する能わず」とあるのは、五石散を服用した後には冷酒を飲んではならないとされているためである。

ともあれ、五石散の服用は、魏晉の風俗に少なからぬ影響を与えていた。晋代の文人たちがみな帯をゆるめてダブダブの服を着て、木屐（木製のゲタ）を履いていたのは、五石散を飲んでいると身体にぴったりとした服や靴を着用することができないからであるといひ、また服喪中に礼法を無視して飲み食いするのも、五石散の服用後は空腹であってはならないからであるという見方もある。⁴⁰⁾

当時の文人たちがしばしば裸でいたり、髪を振り乱したり、足を投げ出して座ったりというのも、実は礼教道徳に対する反駁という思想的な背景を論ずる以前に、薬物の作用が引き起こす生理的な必然性による振る舞いであるというもっと単純な理由である可能性を視野に入れなければならない。前章で挙げた劉伶が部屋の中で裸でいたという逸話の場合でも、もしこれが行散の時であるとすれば、莊子の思想云々ということに加えて、薬物の作用で皮膚が剥けやすく痒いために衣服を脱いでいたというごく簡単な理由も併せて考えられるのである。

いずれにしても、『世説新語』に見られる魏晉の文人たちの奇行・狂態と五石散の服用とは決して無関係ではない。魯迅も前掲の一文の中で、

晋朝の人がみな根性曲りで、傲慢で、狂気じみて、ひどく怒りっぽかったのは、おそらく薬物服用のせいだったのでしょう。たとえば蠅がうるさいと、剣を抜いて追っかけたりします。話し方にしてめっちゃくちゃなのがよい。ときにはほとんど狂ってたりします。⁴¹⁾

と語っている。五石散の服用は険悪な政情の中に置かれていた士人たちの現実逃避の意図も確かにあったであろうが、『世説新語』などの文献を見る限りでは、必ずしもそのような忘憂の目的があったとは思えない。五石散は貴族社会の日常に深く入り込み、ごく普通の生活習慣の一つとなって彼らの精神を蝕んでいたのである。

五石散を常習している場合、その毒性の影響が人格や気性にまで及び、現代の麻薬中毒患者と同じような狂態、いわば病的に精神異常をきたしている「狂」の状態に近い文人がいたとしても不思議ではない。文献の上からも、例えば皇甫謐について『晋書』の伝が、

散を服して節度を失い、或いは食しても復た下らず、昼夜寐るを得ず、愁憂恚怒す。⁴²⁾

と記すように、薬物が人の性癖や日常生活に著しい影響を及ぼしていたことが推察できるのである。

五 アイデンティティーとしての「狂」

最後に一つ触れておきたいのは、魏晋の芸術家における「狂」についてである。そもそも書画などの芸術は、ある種の非日常的な精神活動であり、世俗の外の世界に立脚しようとする点において、「狂」の精神と相通ずるところを持っている。そうした意味において、「狂」は書家・画家としての高雅な風格を表すものであり、「狂」を自任することは、自らを芸術家として位置づけること、芸術家としてのアイデンティティーを示すことにほかならない。ここでは顧愷之を例にとって見てみよう。

顧愷之、字は長康。東晋の画家である。同時代の謝安は、「顧長康の画は、蒼生有りてより来かた無き所なり」（『世説新語』「巧芸」篇⁴³⁾と絶賛している。博学で才気に富んでいたが、また数々の愚かしい奇行が伝えられており「痴」と称された。『世説新語』「文学」篇に収録されている顧愷之の逸話に付した劉注は、宋の明帝の『文章志』を引いて、

桓温云、「顧長康の体中、痴と黠と各々半ばす。合して之を論ずれば、正に平平たるのみ」と。世に云う、三絶有り、画絶・文絶・痴絶、と。⁴⁴⁾

と記している。「画絶・文絶・痴絶」とは、丹青、詩文、そして痴愚のさまにおいて並は

ずれていることをいう。

「痴」もまた「狂」と同じく、原義は否定的なものでありながら、多くの場合、誹謗を意味する言葉ではなく、純真で俗気のない人間像として羨望や敬愛の念を伴った肯定的含意を以て語られる。そして、「痴」という概念は「狂」と表裏一体の関係にある。世俗と相容れない独自の生き方を志向する時、それが内側の精神世界に凝固的に埋没する方向に向かえば「痴」となり、外側の人間社会に対して発散的に対峙する方向に表出されれば「狂」となる。魏晋を代表する「狂」の人阮籍は同時に「痴」の人でもあった。⁴⁵⁾

顧愷之は自分の芸術の世界に没頭し、数々の愚かしいエピソードの中でその奇人ぶりを存分に発揮している。『晋書』「顧愷之伝」には次のような逸話がある。

愷之嘗て一厨の画の其の前を糊して題するを以て桓玄に寄す。皆其の深く珍惜せる所の者なり。玄乃ち其の厨の後をひらき、画を窃み取り、緘閉すること旧の如くして以て之に還し、給きて未だ開かずと云う。愷之封題初めの如くして、但だ其の画の失せるを見て、直だ云う、「妙画は靈に通じ、変化して去れり、亦猶お人の登仙するがごとし」と。了として怪しむ色無し。⁴⁶⁾

桓玄に大切な絵を盗まれてもそうとは気づかず、「絵が素晴らしいあまり神靈に通じ、姿を変えて昇天してしまった」と言ったという有名な話である。同伝にはほかに、謝瞻に吟詠を褒められると得意になって翌朝まで吟じ続けたという話⁴⁷⁾、人の姿を消すことができるという柳の葉のことを信じ込んだという話⁴⁸⁾などが記されている。

「痴」とされる所以となっているこれらの逸話は、諧謔的雰囲気や漂わせていながらも決して滑稽談ではなく、顧愷之の芸術家としての闊達とした風格、超脱とした精神を示すものである。また、言い伝えでは、顧愷之は絵を描く時、靈感が湧くと楼に登って家人に梯子を撤去させ、寝食も忘れて精神を集中し、忘我の境地に入り込んだという。⁴⁹⁾

こうした顧愷之の人物形象は、『莊子』「田子方」篇に登場する「解衣槃礴」の画家の姿を彷彿とさせる。

宋の元君将に図を画かしめんとし、衆史皆至り、揖を受けて立ち、筆を舐め墨を和し、外に在る者半ばなり。一史の後れて至る者有り、儻然として趨らず、揖を受けて立たず、因りて舎に之く。公人をして之を視しむれば、則ち衣を解き槃礴して羸す。君曰く、「可なり、是れ真の画者なり」と。⁵⁰⁾

宮廷に召されても礼儀作法には一切従わず、裸で足を投げ出して一心不乱に絵を描いた者を君主が「真の画者」と呼んだという寓話である。

『莊子』に見られるこうした超脱としてとらわれのない自由奔放な狂態に真の人間のあり方を追求するという審美観は、魏晋の文人たちの反俗的、脱俗的行為の裏に隠された文人精神につながっているのである。顧愷之本人に「狂」や「痴」を自覚的に任ずる意識があったかどうかは定かではない。むしろ、彼の生きた当時、あるいは後世の文人たちが顧愷之の「狂痴」たる人物形象を芸術家のあるべき姿として典型化したところから、いつの間にかそうした顧愷之の虚像が形作られていったと考える方が実情に近いかもしれない。虚像であれ実像であれ、いずれにしても、顧愷之が世に示した高雅な「狂痴」の風格は、いつしか芸術家のアイデンティティーとして標榜されるようになり、芸術家たる者は「狂痴」たるべし、「狂痴」にあらざる者は芸術家にあらずという様相を呈するようになるのである。

おわりに

『世説新語』に見られる狂態の逸話は、魏晋という特異な時代の政治・社会・思想・風俗を象徴する一つの縮図である。本稿では、そうした「狂」の諸相についてさまざまな視点からの考察を試みた。便宜上、カモフラージュとしての「狂」、パフォーマンスとしての「狂」、ファッションとしての「狂」、アイデンティティーとしての「狂」に分けて論じたが、実際には、逸話ごとにこれはこのタイプの「狂」というように明確に振り分けられる問題ではなく、一つの逸話の中に複数の「狂」の相が重なり合う場合がほとんどである。

魏晋の文人の狂態を語る時、この険難な時代の風波を避けるための韜晦的手段として説明されることが多い。「佯狂」を意図した狂態は、殷・周にまで遡る長い歴史を持った伝統的な処世術であり、魏晋の文人たちもそうした手段によって困難な時代を生き抜こうとしていたのである。しかしながらまた一方で、この時代に関しては、老莊思想が盛行していたことに伴い、文人たちは道家流の生き方を志向し、その実践の一つの表れとして「狂」を演じた。したがって、韜晦の狂態にしても、ただ危険な状況から逃げ隠れしようとしたわけではなく、多くの場合、道家思想に基づいた自己主張がその行為の裏に秘められているのである。道家思想の中でも特に『莊子』の影響が大きいことが、本稿の例証の中から見取れるところであろう。また、視点を変えれば、薬物の服用が狂態の具体的な表れ方に少なからぬ作用を及ぼしていたことも、この時代の「狂」を考える際に欠かすこ

とのできない重要な問題である。さらに、書画の世界においては、「狂」であり「痴」であることを真の芸術家の証であるとするような風潮がこの時代に始まり、以後明清に至るまで芸術家たちが「狂痴」たることを誇りとして自任する伝統が続くのである。

本稿は、このようにさまざまな異なる要素を内包した魏晋の「狂」の諸相について、その全体像を把握するために初歩的な整理を試みることに主眼を置いた。本稿で言及しきれなかった個々のさらに詳しい状況や魏晋以降の文学や芸術における「狂」の思想の展開については、いずれ稿を改めて論じたい。

註

- 1) 拙稿「狂狷の系譜——中国古代思想における「狂」の諸相 (一)」(『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第37号, 2006年)、「佯狂の系譜——中国古代思想における「狂」の諸相 (二)」(同第38号, 2007年)参照。後者において、魏晋の「狂」に関しては阮籍のみを取り上げて論じた。本稿は、『世説新語』に見えるさまざまな人物の奇行・狂態について広く論じるものである。
- 2) 原文：「殷仲堪云，三日不讀道德經，便覺舌本間強。」
- 3) 原文：「陳留阮籍，譙國嵇康，河内山濤，三人年皆相比，康年少亞之。預此契者，沛國劉伶，陳留阮咸，河内向秀，琅邪王戎。七人常集於竹林之下，肆意酣暢。故世謂竹林七賢。」
- 4) 原文：「晉文王功德盛大，坐席嚴敬，擬於王者。唯阮籍在坐，箕踞嘯歌，酣放自若。」
- 5) 原文：「文帝初欲爲武帝求婚於籍，籍醉六十日，不得言而止。……籍又能爲青白眼。見禮俗之士，以白眼對之。及嵇喜來弔，籍作白眼，喜不釋而退。喜弟康聞之，乃齋酒挾琴造焉，籍大悅，乃見青眼。由是禮法之士，疾之若讎。……時率意獨駕，不由徑路，車迹所窮，輒慟哭而反。」
- 6) 原文：「籍本有濟世志，屬魏晉之際，天下多故，名士少有全者。籍由是不與世事，遂酣飲爲常。」
- 7) 『文選』卷四三所収。この書簡の中で嵇康が自らの性癖を語った一節に「每非湯武而薄周孔」とある。
- 8) 『管錐編』「全上古三代秦漢三國六朝文」第89則(中華書局, 1979年, 第3冊, 1088頁)。
- 9) 原文：「嗣宗身仕亂朝，常恐懼謗遇禍，因茲發詠。故每有憂生之嗟。雖志在刺譏，而文多隱避，百代之下，難以情測。」
- 10) 原文：「楊駿欲以女妻焉。衍耻之，遂陽狂自免。」
- 11) 原文：「孔車騎與中丞共行，在御道逢匡術。賓從甚盛。因往與車騎共語。中丞初不視，直云，鷹化爲鳩，衆鳥猶惡其眼。術大怒，便欲刃之。車騎下車，抱術曰，族弟發狂。卿爲我宥之。始得全首領。」
- 12) 原文：「諸葛宏在西朝，少有清譽，爲王夷甫所重。時論亦以擬王。後爲繼母族黨所讒，誣之爲狂逆。將遠徙，友人王夷甫之徒，詣檻車與別。宏問，朝廷何以徙我。王曰，言卿狂逆。宏曰，逆則應殺，狂何所徙。」
- 13) 原文：「蘇峻亂，諸庾逃散。庾冰時爲吳郡，單身奔亡。民吏皆去，惟郡卒獨以小船載冰出錢塘口，遽除覆之。時峻賞募覓冰，屬所在搜檢甚急。卒捨船市渚，因飲酒醉還，舞棹向船曰，何處覓庾吳郡。此中便是。冰大惶怖，然不敢動。監司見船小裝狹，謂卒狂醉，都不復疑。自送過淞江，寄山陰魏家，得免。」

- 14) 原文：「晉人多言飲酒，有至於沈醉者，其意未必真在於酒。蓋時方艱難，人各懼禍，惟託於醉，可以疏遠世故。……飲者未必劇飲，酣者未必真醉。」
- 15) 白川静「狂字論」(『文字遊心』平凡社，1996年)，71頁及び79頁。
- 16) 原文：「阮步兵喪母，裴令公往弔之。阮方醉，散髮坐牀，箕踞不哭。裴至，下席於地，哭弔嗻畢，便去。或問裴，凡弔，主人哭，客乃爲禮。阮既不哭，君何爲哭。裴曰，阮方外之人，故不崇禮制。我輩俗中人，故以儀軌自居。」
- 17) 原文：「莊子妻死，惠子弔之。莊子則方箕踞鼓盆而歌。惠子曰，與人居，長子老身，死不哭亦足矣。又鼓盆而歌，不亦甚乎。莊子曰，不然。是其始死也，我獨何能無慨然。察其始，而本無生。非徒無生也，而本無形。非徒無形也，而本無氣。雜乎芒芴之間，變而有氣，氣變而有形，形變而有生，今又變而之死。是相與爲春夏秋冬夏四時行也。人且偃然寢於巨室，而我嗷嗷然隨而哭之，自以爲不通乎命，故止也。」
- 18) 『莊子』「大宗師」篇に「莫然有聞，而子桑戶死，未葬。孔子聞之，使子貢往侍事焉。或編曲，或鼓琴，相和而歌曰，嗟來桑戶乎，嗟來桑戶乎，而已反其真，而我猶爲人猗。子貢趨而進曰，敢問，臨尸而歌，禮乎。二人相視而笑曰，是惡知禮意。子貢反，以告孔子曰，彼何人者邪。修行無有，而外其形骸，臨尸而歌，顏色不變，無以命之。彼何人者邪。孔子曰，彼游方之外者也，而丘游方之內者也」とある。
- 19) 原文：「阮籍遭母喪，在晉文王坐進酒肉。司隸何曾亦在坐曰，明公方以孝治天下。而阮籍以重喪顯於公坐飲酒食肉。宜流之海外，以正風教。文王曰，嗣宗毀頓如此。君不能共憂之，何謂。且有疾而飲酒食肉，固喪禮也。籍飲噉不輟，神色自若。」
- 20) 原文：「在温坐，岸幘嘯詠，無異常日。宣武每曰，我方外司馬。遂因酒，轉無朝夕禮。桓舍入內，奕輒復隨去。後至奕醉，温往主許避之。主曰，君無狂司馬，我何由得相見。」
- 21) 原文：「劉伶恒縱酒放達。或脫衣裸形在屋中。人見譏之。伶曰，我以天地爲棟宇，屋室爲幘衣。諸君何爲入我幘中。」
- 22) 原文：「放情肆志，常以細宇宙齊萬物爲心。」
- 23) 『莊子』「齊物論」篇に「天地與我並生，而萬物與我爲一」とある。
- 24) 原文：「張季鷹縱任不拘。時人號爲江東步兵。或謂之曰，卿乃可縱適一時，獨不爲身後名邪。答曰，使我有身後名，不如即時一卮酒。」畢茂世云，一手持蟹螯，一手持酒卮，拍浮酒池中，便足了一生。」劉尹云，孫承公狂士。每至一處，賞翫累日，或回至半路卻返。」
- 25) 「達」の概念については、牟發松「説達——以魏晉士風問題爲中心」(許昌学院學報，2003年第1期)参照。
- 26) 劉注は「德行」篇「晉文王稱阮嗣宗至愼」の条で『魏氏春秋』を引いて「宏達奔放不羈，不拘禮俗」とあり、「任誕」篇「阮公隣家婦有美色」の条で王隱『晉書』を引いて「達而無檢」とある。
- 27) 原文：「王平子，胡毋彥國諸人，皆以任放爲達，或有裸體者。樂廣笑曰，名教中自有樂地，何爲乃爾也。」
- 28) 劉注は王隱『晉書』を引いて「魏末阮籍，嗜酒荒放，露頭散髮，裸袒箕踞。其後貴游子弟，阮瞻，王澄，謝鯤，胡毋輔之之徒，皆祖述於籍，謂得大道之本。故去巾幘，脫衣服，露醜惡，同禽獸。甚者名之爲通，次者名之爲達也」とある。
- 29) 原文：「初至，屬輔之與謝鯤，阮放，畢卓，羊曼，桓彝，阮孚散髮裸袒，閉室酣飲已累日。逸將排戶入，守者不聽，逸便於戶外脫衣露頭，於狗竇中窺之而大叫。輔之驚曰，他人決不能爾。必我

孟祖也。遽呼入，遂與飲，不捨晝夜。時人謂之八達。」

- 30) 『文選』卷四七所収。
- 31) 原文：「何平叔云，服五石散，非唯治病，亦覺神明開朗。」
- 32) 原題は「魏晉風度及文章与薬及酒之關係」。一九二七年，国民党政府広州市教育局が主催した「広州夏期學術講演会」での講演記録であり、『而已集』に収められている。『魯迅全集』五（学習研究社，1985年）に邦訳がある。以下本論での五石散に関する記述は主にこれに拠る。また，五石散に関する専門の論著としては，余嘉錫「寒食散考」（『余嘉錫論学雑著』中華書局，1963年所収），王奎克「五石散新考」（趙匡華主編『中国古代化学史研究』北京大学出版社，1985年所収）などがある。
- 33) 原文：「秦丞相寒食散論曰，寒食散之方，雖出漢代而用之者寡，靡有傳焉。魏尚書何晏，首獲神效，由是大行於世，服者相尋也。」
- 34) 張仲景には『金匱要略方論』があり，その中の「傷寒雜病論」で感冒の類の治療に関して寒食散についての記述が見られる。
- 35) 原文：「近世尚書何晏，耽聲好色，始服此藥。心加開朗，體力轉強。京師翕然，傳以相授。歷歲之困，皆不終朝而愈。衆人喜於近利，未覩後患。晏死之後，服者彌繁，于時不輟。」
- 36) 寧稼雨「從『世說新語』看服藥的士族精神」（『南開學報（哲學社會科學版）』2002年第1期）は，何晏が過度に色白であったのは「虛寒」の病のためであり，五石散はそうした虚弱體質でありながら色を好んだ何晏の精気を補い房事を助けたとしている。なお，中国中医研究院中医薬信息研究所『中国中薬数拠』によれば，五石散のうち，石鍾乳・石硫黄・白石英は「陽萎」（インポテンツ）を治し，赤石脂は「遺精」（夢精）を抑える効能があるという。
- 37) 原文：「初桓南郡，楊廣共說殷荊州，宜奪殷覬南蠻以自樹。覬亦即曉其旨，嘗因行散，率爾去下舍，便不復還。内外無預知者。」
- 38) 例えば，「言語」篇「謝景重女適王孝伯兒」の条，「文学」篇「王孝伯在京行散」の条，「賞誉」篇「王恭始與王建武甚有情」の条など。
- 39) 原文：「桓南郡被召作太子洗馬，船泊荻渚。王大服散後已小醉，往看桓。桓爲設酒，不能冷飲，頻語左右，令温酒來。桓乃流涕嗚咽，王便欲去。桓以手巾掩淚，因謂王曰，犯我家諱，何預卿事。王歎曰，靈寶故自達。」
- 40) 注32の魯迅「魏晉風度及文章与薬及酒之關係」参照。
- 41) 原文：「晉朝人多是脾氣很壞，高傲，發狂，性暴如火的，大約便是服藥的緣故。比方有蒼蠅撓他，竟至拔劍追趕；就是說話，也要胡胡塗塗地才好，有時簡直是近於發瘋。」
- 42) 原文：「服散失節度，或食不復下，晝夜不得寐，愁憂悲怒。」
- 43) 原文：「顧長康畫，有蒼生來所無。」
- 44) 原文：「桓温云，顧長康體中，癡點各半。合而論之，正平平耳。世云，有三絕，畫絕，文絕，癡絕。」『晋書』の「顧愷之伝」では，「三絶」を「才絶，畫絶，癡絶」としている。
- 45) 『晋書』「阮籍伝」に「或閉戸視書，累月不出。或登臨山水，經日忘歸。博覽群籍，尤好莊老。嗜酒能嘯，善彈琴。當其得意，忽忘形骸。時人多謂之癡」とある。
- 46) 原文：「愷之嘗以一厨畫糊題其前寄桓玄。皆其深所珍惜者。玄乃發其厨後，竊取畫，而緘閉如舊以還之，給云未開。愷之見封題如初，但失其畫，直云，妙畫通靈，變化而去，亦猶人之登仙。了無怪色。」

魏晉の文人における「狂」について

- 47) 原文：「義熙初，爲散騎常侍，與謝瞻連省，夜於月下長詠，瞻每遙贊之。愷之彌自力忘倦。瞻將眠，令人代己，愷之不覺有異，遂申旦而止。」
- 48) 原文：「尤信小術，以爲求之必得。桓玄嘗以一柳葉給之曰，此蟬所翳葉也，取以自蔽，人不見己。愷之喜，引葉自蔽，玄就溺焉，愷之信其不見己也，甚以珍之。」
- 49) 李元媛「才絶・画絶・痴絶——評顧愷之的絵画芸術」（『劇影月報』2005年4月）参照。但し、この伝承の出典については未詳。
- 50) 原文：「宋元君將畫圖，衆史皆至，受揖而立，舐筆和墨，在外者半。有一史後至者，儻然不趨，受揖不立，因之舍。公使人視之，則解衣槃礴羸。君曰，可矣，是真畫者也。」